

サルナシの自生系統の諸特性

荒澤直樹・高橋和博*・駒林和夫**

(山形県農業研究研修センター中山間地農業研究部・*山形県立園芸試験場・**山形県農業技術課)

Characteristics of Wild Strains on Bower Actinidia in Yamagata Prefecture

Naoki ARASAWA, Kazuhiro TAKAHASHI* and Kazuo KOMABAYASHI**

(Department of Hilly and Mountainous Areas Agricultural Studies of Yamagata Agricultural Research and Training Center・*Yamagata Prefectural Horticultural Experiment Station・**Yamagata Prefectural Government Office)

1 はじめに

サルナシはマタタビ科に属し、落葉する性木本で、山形県内にも数多く自生している。果実は甘い香りを放ち、生食及び、果実酒の原料等として利用されている。サルナシは中山間地域の特産果樹として産地育成の気運が高まっていることから、本県で栽培する品種及び自生系統を収集し、その特性を明らかにしたので報告する。

2 試験方法

特性調査は1998年から2000年に、山形県農業研究研修センター中山間地農業研究部で1996年から1997年にかけて収集し植栽した本県に自生する9系統、民間で選抜した2系統と「光香」を対象品種として比較検討を行った。特性調査は、形態、生態及び品質を調査した。そのうち、収穫時果実品質は、果重、屈折形示度及び酸含量を、追熟後の果実品質は屈折形示度及び酸含量に加えエチレン生成量の測定を行った。追熟は2℃で2週間の低温処理後、20℃(湿度90%)の恒温庫内で処理を行った。エチレン生成量は容積600mlのポリビンに果実約100gを入れ、15℃に2時間放置後、ヘッドスペース法によりガスクロマトグラフィで測定した。

3 試験結果及び考察

(1) 生態及び形態

各系統の展葉期は、5月2日、同じく満開期は6月15～17日であり「光香」と同様であった。また収穫期は9月26日～10月25日であり、「光香」に比べ早生や晩生の系統があった。葉の形態は葉柄色が緑と赤があり、果形は偏円や円筒形と様々であった。果重は10g前後が多く「光香」と同等であった(表1)。

(2) 開花及び結実特性

結実率はM-8が調査年すべてで結実しなかった。その他の系統はM-3, 10, N-1が50%前後と「光香」に比べ低かったが、それ以外は「光香」と同等であった(表1)。

(3) 果実品質

果径の伸びは7月上旬まで顕著であり、8月下旬以降は緩慢であった(図1)。また果実は時期が遅くなるほど屈

表1 系統別生態及び特性(1999, 2000年の平均)

系統・ 品種	展葉期	満開期	収穫期*	葉柄色	果形	果重 (g)	結実率** (%)
M-1	5月2日	6月16日	10月1日	赤	偏円	10.5	87.5
M-2	5月2日	6月16日	10月19日	緑	長円筒	8.3	91.6
M-3	5月2日	6月15日	9月29日	赤	偏円	9.8	52.4
M-4	5月2日	6月17日	10月21日	緑	長円筒	8.1	88.8
M-5	5月2日	6月15日	10月2日	赤	偏円	10.8	86.7
M-6	5月2日	6月15日	10月17日	緑	短円筒	9.1	75.9
M-8	5月2日	6月15日	-	赤	-	-	0.0
M-9	5月2日	6月15日	10月3日	赤	偏円	11.3	75.5
M-10	5月2日	6月15日	9月26日	緑	短円筒	8.5	50.8
N-1	5月2日	6月17日	10月15日	緑	長円筒	10.0	54.6
N-2	5月2日	6月17日	10月25日	緑	長円筒	11.9	71.0
光香	5月2日	6月17日	10月10日	緑	長円筒	9.4	75.2

*収穫期は、追熟後の果実品質が最も揃った収穫日とした。

**結実率は、目通りの高さ20花そうを調査(N-1, 2及び「光香」のみ10花そう)

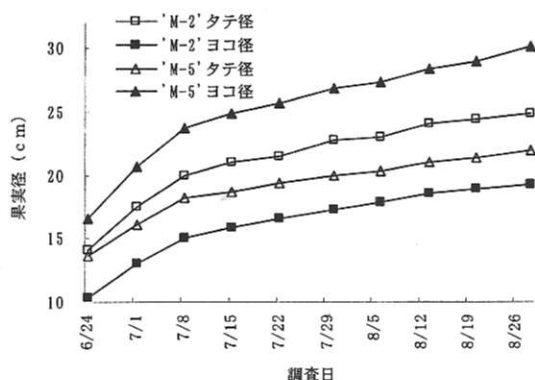


図1 'M-2' 及び 'M-5' の果径の推移(1998年)

折形示度、酸含量とも増加していた(図2, 図3)。また追熟後果実は追熟前に比べ、糖度が著しく増加し、酸度は低下した(表2)。追熟中のエチレン生成量はM-2では収穫後のエチレン生成は少ないが、M-4では収穫後20日後から多くのエチレンを生成していた(図4, 図5)。

4 まとめ

サルナシ自生系統の特性は以下のとおりであった。

(1) 展葉期は5月上旬、満開期は6月中旬であった。収穫期は系統による差が大きく、9月中旬から10月中旬であっ

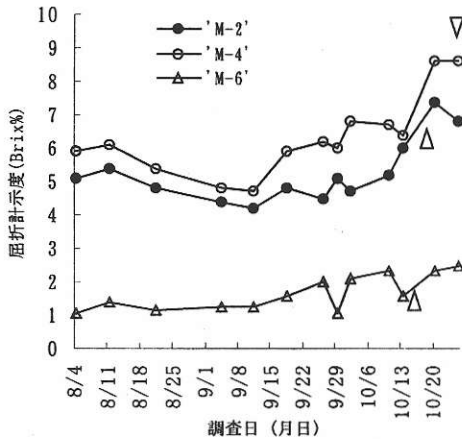


図2 糖度の推移 (2000年) △は収穫盛期

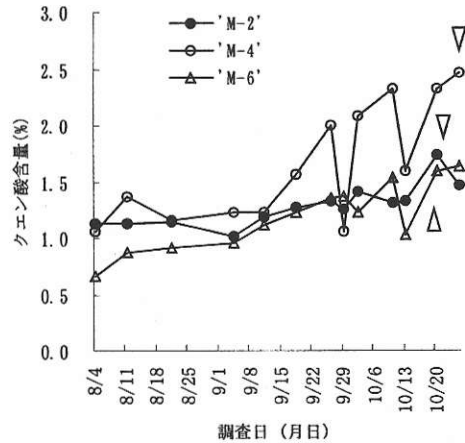


図3 酸度の推移 (2000年) △は収穫盛期

表2 系統別糖度と酸度の違い (2000年)

系統・ 品種名	糖度 ¹⁾ (A) (brix%)	酸度 ²⁾ (B) (g/100ml)	糖酸比 (A/B)
M-2 (果形: 長円筒)	7.4	1.73	23.4
収穫時	16.5	0.59	3.6
追熟後	17.4	0.60	3.4
M-4 (果形: 長円筒)	8.6	2.32	27.0
収穫時	17.4	0.60	3.4
追熟後	15.1	0.96	6.4
M-5 (果形: 偏円)	5.3	1.52	28.7
収穫時	15.1	0.96	6.4
追熟後	8.9	1.59	17.9
M-6 (果形: 短円筒)	19.2	0.44	2.3
収穫時	17.9	0.77	4.3
追熟後	—	—	—
光香 (果形: 円筒)	—	—	—
収穫時	—	—	—
追熟後	—	—	—

注. 収穫後直ちに2℃で10日予冷し, その後20℃で追熟させた。追熟完了は可食出来た時点とした。

1) 屈折形示度 2) クエン酸含量

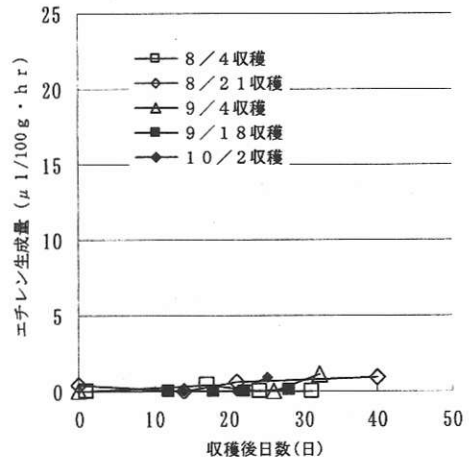


図4 'M-2' 収穫後のエチレン生成量 (2000年)

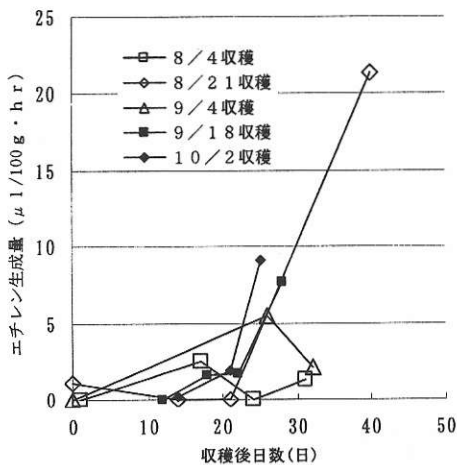


図5 'M-4' 収穫後のエチレン生成量 (2000年)

た。

(2) 葉柄色は赤と緑の二つがあった。

(3) 雄花のみの系統があり, 結実系統, 品種によって異なり, 高いものは80%以上の結実率であった。

(4) 果実は, 生育中は糖度, 酸度とも増加し, 追熟することにより糖度は著しく増加し, 酸度は低下した。

(5) 追熟中の果実は, エチレン生成が多い系統と少ない系統があった。